



監督＝ジョン・ウー／出演＝ベン・アフレック／アーロン・エッカート／ユマ・サーマン
(UIP 配給／2003年アメリカ映画／118分)

極秘プロジェクトに参加して巨額の報酬を受領するかわりに、そのプロジェクト従事者の記憶を抹消。最長2カ月と決めれば確かにそれは可能かも……？ しかし、6000万ドル（約60億円）とひきかえに3年間仕事に従事し、その3年間の記憶をすべて抹消するとなると、それはかなりヤバイ。それを決意した主人公の動機は？ 3年後のハプニングは？ そして物語の結末は？

🎬 ペイチェックとは？

最近、タイトルの解説から入るパターンが増えてきた。しかし、これには、① そうすることによって、映画の面白い切り口を示すことができるという積極的なケースと、② そうしなければ何の映画かサッパリわからないというケースに分かれる。この映画は、明らかに後者。

ペイチェックとは、「高い報酬」ということ。しかし、それだけでは何のことかわからない。そこで、邦題ではサブタイトルとして「消された記憶」とつく。つまり、「消された記憶」の代わりに得る「高い報酬」ということだ。しかし、「記憶を消す」、そんなことが可能なのか？ それは「近未来」では可能らしい。映画の時代設定では、何年とはされていないが、「今からそう遠くない未来」とされている。しかも、すべての記憶を消すのではなく、「ある期間だけの記憶を消す」とのこと。

しかし、このように、記憶を消すことの報酬って、いくらもらえば妥当なの

か？ 考えればメチャ難しいことだ。

主人公はコンピューター技師

記憶を消すことを了解して、高い報酬をもらっているのは、コンピューター・エンジニアのマイケル・ジェニングス（ベン・アフレック）。若くて優秀な能力を持つ彼は、人が数年かかってやるコンピューター開発の仕事を最長2カ月でやってしまう。2カ月というのは、彼が自分で決めた、記憶を消すことをオーケーする最長期間。彼が短い期間で、仕事を完成させることができるのは、完成されたコンピューターシステムを他社からうまくパクってきた上で自分のアイデアをそれに付加する能力があるため。「パクってくる」のも立派な能力の一つと割り切っているわけだ。

彼の記憶を消すのは、コンピューターシステムの開発に携わったエンジニアから、その情報が外部に漏れるのを防ぐため。

「秘密保持義務条項」は、私が弁護士として、顧問会社の契約書を作成したりチェックすると、必ず入れ込む条文だが、その実効性には実は問題がある。すなわち現実には、この「秘密保持義務条項」に違反して、コンピューターソフト開発時に「業務上知り得た秘密」を漏らしたことを理由とする「損害賠償訴訟」が起きており、今後これが多発することが予測される。したがってその防衛策として、開発期間中これに携わったエンジニアの記憶を消すことが、医学的に可能となれば、それが合法化される可能性も無きにしもあらずだが……？

しかし、本当にそうならば、実にイヤな社会だね……？ あまり、そんな社会の中で生きていきたくない……？

金に目がくらんだ(?) 主人公

主人公マイケルは、昔の友人で今はオールコム社の社長となっているレスリック（アーロン・エッカート）から呼び出された。その業務は、例によって極秘プロジェクトへの参加だが、今回は6000万ドル（60億円）という一生遊んで暮らせるほどの巨額の報酬。もっとも、その対価はきつい。そのプロジェクトの完成には3年かかるため、3年間のジェニングスの記憶を抹消することが条件だ。いく

ら何でも、3年間の人生を切り売りするのはきつすぎる。しかし、その対価は6000万ドル。迷ったジェニングスだが、それをオーケーしたのは、何とエンジニアであるジェニングスにあるまじきスケベ心……？ つまり、次に述べるレイチェル・ポーター博士がそのプロジェクトにいたことがわかったためだ。いやはや、いくら天才でもやっぱり男はアホ……？

相棒は、あの『キル・ビル』のユマ・サーマン

既にオールコム社の極秘プロジェクトに参加していたのは、金髪の美人ながら、れっきとした生物学者のレイチェル博士（ユマ・サーマン）。この2人のパーティーでの出会いは結構面白い。

レイチェルは長身のブロード美人だから、パーティーでバッチリきめると目立つのは当然。かなり大きく胸の開いたドレスだからなおさら。ジェニングスは天才プログラマーだが、結婚志向ではなく、かなりのプレイボーイ。そんな彼の口説き文句とレイチェルの受け答えは結構面白く、参考になる。「これぞ大人の会話」というオシャレなもの……。

プロジェクトへの参加を決意し、すべての「私物」を預けて、研究室の門をくぐったジェニングス。するとそこからたちまち3年が過ぎ、場面は3年後に。そりゃそうだ。ジェニングスが極秘プロジェクトに携わった3年間の記憶はすべて消されてしまったのだから、映画は3年後からスタートするしかない。

映画を解くカギは19のアイテムだが……

この映画の原作は「現代で最も重要なSF作家」と謳われた巨匠フィリップ・K・ディックの作品。時代設定は「今からそう遠くない未来」だが、明らかにSFの世界。ジェニングスが3年間の仕事を終えて、研究所から出てきた時に返された「私物」は、3年前に自分が預けたものとは異なる19点のがらくた（アイテム）。しかも、「受け取りは法律事務所で」と言われて、法律事務所へ行き、いつものように弁護士から報酬の小切手を受領しようとしたところ、弁護士から、「あなたは自分で報酬の受け取りを放棄する書類にサインしています」と告げられた。一体これは何だ！ 6000万ドルの報酬を放棄するなんてバカげたことがあ

るはずがない！ 記憶のない3年間の間に一体何があったのか？ 自分はどうすればいいのか……？

しかし悪いことは重なるもの。法律事務所を飛び出したジェニングスは、今度はFBIに逮捕されて連行され、「お前は国家の重要情報をバラした犯人だ。さあ吐け！」と言われる始末。これでは、6000万ドルを期待して頑張った3年間で踏んだり蹴ったりだ……。

何とかFBIの取り調べから逃げ出したジェニングスは、FBIからもそしてオールコム社の刺客(?)からも追われる羽目に。そんなジェニングスを守るのが、仕事終了後に弁護士から手渡された19点のがらくた。これには一体何の意味が……？ 映画を観ていても、結構このストーリーの解明は難しい。だからまあその追及はほどほどに……。

レイチェル登場！

あの美しく魅力的なレイチェル博士は、3年間何をしていたのか？

実はレイチェルは、ジェニングスと恋に落ち、同棲生活をしながらともに研究に携わっていたのだった。だから話はややこしくなる。つまり、ジェニングスの3年間の記憶を消すということは、このレイチェルとの幸せな生活も消すということ。レイチェルにしてみれば、これはつまり最愛の恋人が目の前から突然消えてしまうということだ。これはレイチェルも了解事項だったのか？

それはよくわからないが、了解していたとしても、現実にはそう簡単には割り切れないだろう。

他方、ジェニングスも、それまでの最長2カ月間の記憶抹消は、実生活での影響は小さかった。たまたまその時付き合っていたA子さんやBさんのことが突然記憶から消されてしまっても、プレイボーイのジェニングスには特段の不都合はなかったから。また、どの野球チームが優勝したか、どの試合で誰がホームランを打ったかを記憶していなくとも、それも大きな支障ではなかったから。

実は私も、「記憶喪失」ではないが、司法試験の受験勉強に集中していた1年半の間には同じような「情報喪失」の体験がある。すなわちこの時期だけ、野球、音楽、映画その他あらゆるエンタメ情報がほとんどゼロとなっていたわけ

だ。もっとも、情報ゼロは、そういう分野だけであり、下宿・食事・風呂そして彼女との付き合いという生活に直結した情報は忘れるはずはない。

3年間もこの「生活に直結する情報」がすべて消されたとなると、それは実生活へ支障が生ずることは明らかだ。しかもこの映画のように、6000万ドルがパーになったうえ、FBIから追っかけられるというのでは、何とも割が合わないことおびただしい……。

しかし、それを助けたのはレイチェル。「私のことも忘れたの？」と悲しげに迫るレイチェルの応援と、19点のがらくたを手がかりに、何とかジェニングスは「復活」の^{のろし}烽火を……。

ジョン・ウー監督の魅力（？）

この映画の監督は、香港映画からハリウッドに進出して成功をおさめているあのジョン・ウー監督。1986年の香港映画『男たちの挽歌』で大成功したジョン・ウー監督は1990年代にはハリウッドに進出し、『フェイス／オフ』（97年）で大成功し、さらに『M:I-2』（00年）、『ウィンドトーカーズ』（01年）、『パレット・モンク』（03年、製作のみ）と続いている。

私は『ウィンドトーカーズ』は大好きで、『フェイス／オフ』はまずまず。そして、『M:I-2』、『パレット・モンク』はキライ。つまり、どちらかというとしリアスもの、現実モノの方が好きで、マンガ的なモノはあまり好きではないということ。そしてこの『ペイチェック』もどちらかというところ、訳のわからない部分はキライ。私が納得できるのは、ジェニングスとレイチェルとの絆と愛情。

最初の出会いでモーションをかけたジェニングスが、フラれて引き下がろうとした時、「チャンスは2度ないの？」と、思わせぶりで、前向きな言葉を投げかけたレイチェルのスタンスが、この映画では最後まで生きている。それが基本的にはバカバカしいストーリーのこの映画での最大の救い。

BMWのバイクの後部座席にレイチェルを乗せてのオールコム社の刺客（？）とのカーチェイスや、ラストでの研究所の大爆破などはジョン・ウー監督いつものアクションでそれなりに楽しいもの。しかし、コンピューター技師のジェニングスが棒術の達人だったり、美しい生物学者のレイチェルが突然『キル・ビル』

(03年)のプライドのようなアクションで蹴りを見せたり、というのはちょっとノリすぎ。やっぱり学者は学者だけの能力に限定した方がベター。

かつて「ベルリンの壁」をはさんだ東西冷戦構造という時代状況の中で製作された『引き裂かれたカーテン』(66年)では、東側の軍事機密を探ろうとするアメリカの研究者ポール・ニューマンとジュリー・アンドリュースのようなシリアスな学者が登場したが、やはりこの方が自然ですんなりストーリーに入っていくというもの。

ジョン・ウー監督には、あまり奇をてらわず、オーソドックスな映画をつくることを願いたい。

ベン・アフレックの魅力

ベン・アフレックは、何と言ってもあの『パール・ハーバー』(01年)が最高。長身でハンサム、そして演技力抜群ときているからハリウッド期待のホープであることはまちがいない。そして彼は、これも若手のホープであるマッド・デイモンと親友。2人してこれからのハリウッドを背負う俳優であることは確実。

ベン・アフレックは『パール・ハーバー』の後も、『トータル・フィアーズ』(02年)、『チェンジング・レーン』(02年)などに次々と出演しているが、決定的なコレという作品がない。どれも、ほどほどに面白く、ほどほどの出来といった作品。

ニコール・キッドマンが2001年にトム・クルーズと離婚した後、急に輝きを増し(?)、2002年の『めぐりあう時間たち』でアカデミー主演女優賞を獲得。さらに最近の『コールドマウンテン』や『ドッグヴィル』などの素晴らしい作品とめぐりあい、素晴らしい演技を見せていることを考えると、このベン・アフレックにも何かきっかけが欲しいもの。きっかけさえあれば、突然大ブレイクする可能性を秘めた魅力的な俳優だが……。もっとも、ハリウッドにはきら星の如く輝くそんなスターはゴロゴロいるというのが実態か……。しかし、何かと期待したい俳優だ。

2004(平成16)年3月22日記